
鬼火

くら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼火

【Nコード】

N8705H

【作者名】

くら

【あらすじ】

とても短いはなしです。一晩中暑苦しい街の喧噪から裏路地にそれると海がある。満天の星とこの世から離れたミステリアスな一瞬のはなしです。

市場でのあまりの喧噪にうんざりして、私はふらふらと脇道にそれていった。

いい加減夜も深くなっているのに市場では人がごった返して、電灯がぎらぎらと明るい。

あの脂ぎった光と暑苦しい人いきれに私は一人だけおいてけぼりをされたみたいに孤独になって、市場の明るい興奮は目眩を起こした。細い小道へちよつとずれるだけで、静かで、夜らしくなる。

さつと冷たい風が私を攫うと頭が冴えて心地よくなった、振り返ると市場のにぎわいは遠くにぼんやり霞んでいる。

しばらく冷たい路地をひっそり歩いていると急に開けたところに出た。

海岸だった。

船一つない寂しい海岸だったが、広がった。

海が黒い。真っ黒な寒天みたいに静かに震えている。

空の星は見渡す限り、夜に満ちて、溢れて、零れそうだ。

ちよつとお目にかかれなくらいに、空を埋め尽くしている。

私は海に少し触れてみた。

思った程冷たくない。

ズボンとシャツ、それに靴と靴下を脱いで、真っ黒な水の中に入っていた。

夜の海は、私の身体を満たしても全然それと気が付かせない。

地面に足が着かなくなつて、ただ、浮いてるだけなのに、浮かんでいるやら流されているやら、はたまた沈んでいるのだろうか、もしかしたら海と空は夜になると境が無くなって今は空に浮いているのかも知れない。

私は、それでもやっぱり海に浮いていて、空を眺めていた。

なんだか海の真ん中まで、ぽつん、と流されてしまった気がして怖

くなった。

あんまり大きな海にぽつんと流されてしまったら、誰にも気がつかれないだろうなあ。

ただ、一人で、ずっと浮いて、流れて、広い海を永遠に、誰にも気がつかれないで、ぽつんと、ぷかぷかと。

そんなことを考えながら、空を見ていると無性に悲しい。星は取り留めもなく煌めいている。

あんなに沢山ある。

「今日は星が沢山あるなあ。綺麗だなあ」

……あれは星ではありません。……

どこからか声がした。

隣に少年が浮いていた。

彼は裸で、眠そうな顔を空に向けて私に話し掛けてきた。

「あれは星ではありません」

「ふうん？」

「あれは鬼火です」

とぷん、と身体が沈んだ。

黒い海の底までゆっくりと下降していく。思った程息苦しくはない。身体が青い炎に変わっていくのが分かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8705h/>

鬼火

2011年1月4日14時59分発行